

芭蕉、杜国を伊良湖に訪ねる

（「笈の子文」より） 藪野直史

「やぶちゃん注：これは私のブログ・カテゴリ「松尾芭蕉」で二〇一三年十二月十二日に公開したものを、ほぼそのままにPDF化したものである。私のPDFソフトには性能限界があり、一語の文字や文字列が横転してしまうが、縦書の妙味の誘惑には勝てない。横転していても読めぬことはない。悪しからず。なお、これは私のブログの六十三万アクセス突破記念として作成した。」

三川の國保美といふ處に、杜國が忍びてありけるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より後さまに二十五里たづねかへりて、その夜、吉田に泊る。

寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき

天津繩手、田の中に細道ありて、海より吹き上ぐる風いと寒き所なり。

冬の日や馬上に凍る影法師

保美村より伊良古崎へ―峠ばかりもあるべし。三河の國の地續きにて、伊勢とは海へだてたる所なれども、いかなる故にか、『萬葉集』には伊勢の名所の内に撰び入れられたり。この州崎にて碁石を拾ふ。世に伊良湖白といふとかや。骨山といふは鷹を打つ處なり。南の海の

はてにて、鷹のはじめて渡る所といへり。伊良湖鷹いらかたかなど歌にも詠よめり
けりと思へば、なほあはれなる折ふし。

鷹一つ見付てうれし伊良湖崎

(以上は「笈の小文」本文より。底本は「新潮古典集成」の富山奏校
注「芭蕉文集」を恣意的に正字化して示した。なお底本では句の位置
は二字下げである)

*

寒けれど二人寝る夜ぞ頼たのもしき (「笈の小文」本文)

越人と吉田の驛にて

寒けれど二人旅ねぞたのもしき (「曠野」)

寒けれど二人旅ねはたのもしき (「笈日記」)

*

旅宿

ごを焼たいてて手拭たぬぐひあぶる寒さ哉 (「笈日記」)

ごを焼たいてて手拭たぬぐひあぶる氷かな (「如行集」)

*

冬の日や馬上に凍る影法師

(「笈の小文」本文)

あまつ繩手を過とて

冬の日の上すくむ影法師

(「如行集」)

あま津なはて

さむき田や馬上にすくむ影法師

(伊良古崎紀行真蹟)

訪杜國紀行(杜國を訪ふ語中)

すくみ行や馬上に氷る影法師

(「笈日記」)

*

伊良古に行道、越人酔て馬に乗る

ゆきや砂むまより落よ酒の酔

(伊良古崎紀行真蹟)

*

鷹一つ見付てうれしいらご崎

(「笈の小文」本文)

*

いらごききほどちかければ、見にゆき侍りて
いらご崎にる物もなし鷹の聲
(真蹟詠草)

*

杜國が不幸を伊良古崎にたづねて、鷹のこゑを折ふし聞て
夢よりも現の鷹ぞ頼母しき
(越人編「鵲尾冠」)

*

人のいほりをたづねて
さればこそあれたきまゝの霜の宿
(「曠野」)

逢杜國 (杜國に逢ふ)

さればこそ逢ひたきまゝの霜の宿
(「笈日記」)

*

島邑 はたけむら 杜國が閑居を尋て

麥はえてよき隠家や島村
(「笈日記」)

麥蒔て隠れ家や島むら
(「如行集」)

*

此里をほびといふ事は、むかし院のみかどのほめめさせ玉ふ
地なるによりてほう美といふよし、里人のかたり侍るを、い
づれの文に書きとどめたるともしらず侍れども、いともかし
こく覚え侍るまゝに

梅つばき早咲ほめむ保美の里

(真蹟詠草)

*

しばらくかくれるける人に申遣す

先祝へ梅を心の冬籠り

(「曠野」)

「やぶちゃん注：貞享四（一七二五）年、芭蕉四十四歳。同年十一月十日から十三日の作。芭蕉が越人を伴って杜国の謫居を伊良湖崎直近の畠村（畑村とも書く。現在の愛知県渥美郡田原市福江町内）に訪ねた際の一冊の句群である。まず、二人の登場人物について。

★

坪井杜国（？）元禄三（一七〇〇）年は、本名を坪井庄兵衛といい、名古屋蕉門の有力者で、御園町の町代を勤めた富裕な米穀商（屋号壺屋）であったが、米延商空米売買（「空米」とも読む。実際には現物の米を確保していないにも拘わらず、店蔵には米があるかのように偽って米を売買するところの、現在でいう先物取引のこと。当時は御法度の死罪相当の重罪であった。但し、[ウィキの「帳合取引」](#)によれば、この四十五年後の享保一五（一七三〇）年には大坂の堂島米会所に限って認められ、以後は大坂以外の米が集積される諸都市でも幕府の規

制にも拘わらず空米取引が実施されていたとあり、実際には杜国の生きた頃も陰では頻繁に行われていたように思われる)の罪に問われて、この二年前、貞亨二(一七二五)年八月十九日附で、家財没収の上、処払い(尾張藩領内からの追放)の身となり、南彦左衛門と改名した上、ここ畠村(当時の渥美半島の殆んどは田原藩であったが、彼の居たこの畠村は大垣新田藩藩庁が置かれた主藩である大垣藩の飛地的存在であった)に流刑となり、以後晩年まで三河の国保美(先の畠村の直近で後に合併して福江村となっていることや詞書の故実などから見て、「保美」は「畠村」を含むこの一帯の古称であったものと考えてよい。)に謫居した。一帯にさせて戴いた伊藤洋氏の「芭蕉DB」の「坪井杜国」には、尤も、『監視もない流刑の身のこと、南彦左衛門、俳号野人または野仁と称して芭蕉とともに『笈の小文』の旅を続けたりもしていた』とあり、さらに『一帯によると、杜国は死罪になったが、この前に「蓬萊や御国のかざり松木山」という尾張藩を讃仰する句を作ったことを、第二代尾張藩主徳川光友が記憶していて、罪一等減じて領国追放になったという』ともある。また、これはかなり知られたことであるが、杜国は、まさにこの時の同道の越人と並んで、伊藤氏も挙げておられるように、『芭蕉が特に目を掛けた門人の一』』であって、さらに彼等の師弟関係には衆道の匂いが相当に濃厚なである(不審な方は次に掲げる「嵯峨日記」を読みたい。なお、日本の近代以降のアカデミズムが衆道をどこかで異常性愛として意図的に避けて否定しようとする傾向は、南方熊楠が痛烈に批判したように、歴史的な本邦の性愛史を正しく見ようとする見ようしない非学問的立場であると断ずるものである)。享年三十余歳とされる(一帯にさせ

せて戴いた伊藤洋氏の「芭蕉DB」の「[坪井杜国](#)」では三十四歳とす
る。すると生年は明暦三（一ノト出）年となる。現在、福江町にあ
る隣江山潮音寺に墓がある。因みに杜国の逝去の翌年に書かれた「嗟
峨日記」の元禄四（一ノト出）年四月二十八日の条には以下のように
ある（底本は富山奏校注「芭蕉文集」で恣意的に正字化した）。

廿八日

夢に杜國が事をいひ出だして、涕泣して覺む。

心神相交る時は夢をなす。陰盡きて火を夢見、陽衰へて水を夢見る。
飛鳥髪をふくむ時は飛べるを夢見、帯を敷き寝にする時は蛇を夢見る
といへり。『枕中記』・槐安國・莊周が夢蝶、皆そのことわり有りて妙
を盡さず。わが夢は聖人君子の夢にあらず。終日妄想散亂の氣、夜陰
の夢またしかり。誠にこの者を夢見ること、いはゆる念夢なり。我に
志深く、伊陽の舊里まで慕ひ來りて、夜は床を同じう起き臥し、行脚
の勞を共に助けて、百日がほど影のごとくに伴ふ。ある時はたはぶれ、
ある時は悲しび、その志わが心裏にしみて、忘るることなければなる
べし。覺めてまた袂をしぼる。

この「嗟峨日記」に出る夢理論は、概ね「烈子」の記載に基づく（以
下、これに詳細な注を施すとなると膨大になるので禁欲的に注した）。

- ・「妙を盡さず」は奇妙なことではない、の謂い。
- ・「念夢」とは常に深く心に執着して思念しているために見る夢。
- ・「我に志深く……」以下の部分は、「笈の小文」の後半の旅を指す。

この伊良湖崎訪問の翌貞享五（一ノト出）年の三月、今度は杜国が

伊勢に渡って芭蕉と落ち合い（これはこの伊良湖崎訪問の際に約束されていたものと考えられる。なお既にその頃、伊良湖崎から伊勢に向かう海路の定期便があり、杜国は通過出来ない尾張領内を廻らずとも伊勢へ行けた）、同十九日には、芭蕉は杜国に「万菊丸」という稚児名を与えて吉野の花を愛でに同行した。その時の「笈の小文」の唱和吟を示す。

乾坤無住同行二人

吉野にて櫻見せうぞ檜笠

吉野にてわれも見せうぞ檜笠

万菊丸

この後も須磨・明石各地とともに吟行、杜国はこの五月に伊良湖に戻った（この部分の注は杜国の菩提寺「潮音寺」公式サイト内の「[杜国墓碑と三吟句碑](#)」を「[雲](#)」にさせて戴いた。……「終日妄想散亂の氣、夜陰の夢またしかり。誠にこの「杜国」を夢見ること、いはゆる念夢な」ればこそ……亡き杜国とは「ある時はたはぶれ、ある時は悲しび、その志わが心裏にしみて、忘ることなければなるべし。覺めてまた袂をしぼる」……これはもう、並大抵の愛し方では、ない……

迦祿に杜国の代表句を示しておく。岩波文庫堀切実編注「蕉門名歌選」の坪井杜国を参考にしたが表記は必ずしもそれに従っていない。

つゑをひく事僅に十歩

つゝみかねて月とり落す霽かな

(「冬の日」)

うれしさは葉がくれ梅の―つ哉

(「春の日」)

馬はぬれ牛は夕日の村しぐれ

(「春の日」)

この比の氷ふみわる名残かな

(「春の日」)

舊里の人に云ひつかはす

こがらしの落葉にやぶる小ゆび哉

(「曠野」)

翁に供られてすまあかしにわたりて

似合しきけしの―圃や須廣の里

(会木編「藁人形」)

戴叔倫が首蓋東流の句を身のうへに吟じて

行秋も伊良古をさらぬ驪鞍

(「鵲尾冠」)

舊里を立去て伊良古に住侍しころ

春ながら名古屋にも似ぬ空の色

(「はるのかほ」)

岩波文庫堀切実編注の「蕉門名歌選」の注によれば、「この比の」の句は、貞享元(一ト)年十二月末、「野ざらし菴」の途次、暫く名古屋に滞在していた芭蕉が熱田へ向かって旅立つのを見送った際の吟詠である。「こがらしの」以下は伊良湖崎謫居後の句。「戴叔

倫が『訃謚冊』は「三体詩」に載る、盛唐の詩人戴叔倫の、

湘南即事

盧橘花開楓葉衰

出門何處望京師

訃謚冊夜無流涕

不爲愁人住少時

湘南即事

盧橘 花開きて 楓葉衰ふ

門を出でて 何れの處にか京師を望まん

訃謚冊 日夜 東に流れ去り

愁人の爲に住まること少時くも爲ず

である。この詩は「徒然草」の第二十一段でも、『万のことは、月見るにこそなぐさむものなれ。或人の、「月ばかり面白きものはあらじ。」と叫ひしに、また一、「露こそなほあはれなれ」とあらそひしこそをかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。月花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩にくだけて清く流るる水のけしきこそ、時をも分かずめでたけれ。『訃謚冊』日夜、東に流れ去る。愁人のためにとどまること、しばらくもせず。」といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。『訃謚冊』も、「山澤に遊びて魚鳥を見れば、心楽しむ。」と叫へり。人遠く、水・草清き所にさまよひ歩きたるばかり、心慰むことはあらじ』と引用する著名な詩である。



越智越人(明暦二(一〇五〇)年/明暦元年ともく享保末(一〇八〇)頃)は北越(越後か)生まれで名古屋で紺屋を営んでいた。蕉門十哲の一人。通称重蔵・十蔵。その編書「鵲尾冠」の中では「私は越路の者に候間、名も越人と申候。壯年に及ぶ比より故郷を出、流浪仕り、貧乏にて學文など申事不存」と述べているが、漢詩文にはかなり造詣が深かった。「笈の小文」の後、元禄元(一〇九〇)年八月には芭蕉の「更科紀行」の旅に随行して下向、そのまま二ヶ月ほど芭蕉庵に滞在して、その後名古屋に帰って俳人として活躍した。だが、元禄六

(一〇九三)年に出た壺中編の「弓」を後援した辺りから芭蕉晩年の新風への変化についてゆくことが出来なくなり、次第に芭蕉から離れ、一掃遣、俳壇から姿を消した。後、芭蕉没後二十一年目の正徳五(一七一五)年頃になって再び俳壇に復帰、「鵲尾冠」「庭竈集」などを編んでは、支考らと論争をしたりしたが、往年の精彩を欠き、結局、孤独貧窮のうちに八十歳ほど没したとされる。名にし負う蕉門十哲の中で没年が分からないというのは珍しい(以上は主に「朝日日本歴史人物事典」及び岩波文庫堀切実編注の「蕉門名歌選」の越人の事蹟記載などを参照した)。この当時、彼は満三十一、二歳である。

迦祿に越人の代表句を示しておく。岩波文庫堀切実編注「蕉門名歌選」の越智越人を参考にしたが、表記は必ずしもそれに従っていない。

三月十九日舟泉邸

山吹のあぶなき岨のくづれ哉

(「春の日」)

のがれたる人の許へ行くとして

みかへれば白壁いやし夕がすみ

(「春の日」)

華にうづもれて夢より直ちまに死なんかな

(「春の日」)

餞別

藤の花たぐうつぶいて別れ哉

(「春の日」)

貧家の玉祭

玉まつり柱にむかふ夕べかな

(「春の日」)

行燈あんどんの煤けぞ寒き雪のくれ

(「春の日」)

うらやましおもひ切る時猫の嚙

(「猿蓑」)

秋のくれ灯やとぼさんと問ひにくる

(「類題発句集」)

「玉まつり」の貧窮の己の生活を切り取った句の評釈で草野平は、『名古屋流寓時代、富裕な杜国らの援助を受けていたころの体験を詠んだものである』(下線やぶちゃん)とある。「笈の小文」のこの芭蕉と杜国の邂逅を読む時、我々はバイ・プレイヤーとしての二人に縁のある(それは秘やかな意味に於いてもある)越人の役柄と、画面の端でのトリック・スターの演技(特に伊良湖到着までの)を決して見逃してはならないと私は思う。



以下、まずは冒頭に掲げた「笈の小文」の本文パート注釈から入る。
なお、「笈の小文」の詳細については個人の「[艸芳サイト](#)」の「[笈の小文](#)」のページが詳細を極め、本記述でも旅程など、[一書一冊](#)にさせて戴いた。必見のサイトである。

☆

●「三河の國保美」前掲の「坪井杜国」の注を参照のこと。なお、「艸芳サイト」の「[笈の小文](#)」の「[保美（伊良湖）](#)」の頁によれば、この地は『店に奉公していた人の郷里のようだ』とあり、『当時、番頭や手代のせいにして、自分は罪を逃れる例が多かったようだから、罪を―[毎](#)で負った杜国への感謝もあ』ったに違いないとされており。これは彌の句「先祝へ」句に関わる杜国の家僕（後述）とする「[權七](#)」なる男の郷里であったと仮定すると、しっくりくる。なお、リンク先では艸芳氏は―[澁](#)には知られていない杜国の弟とも思われる男の殺人事件と刑死（訪問の直近、貞享四（一七二七）年四月に出来町の「坪井庄八」なる者（もとは杜国の住んでいた名古屋御薮町に住まっていたとする）が、妻と妻の付人を斬殺して下女にも傷を負わせて同年六月に斬首されたというエピソード）などが語られており、頗る興味深い。

●「[鳴海](#)」東海道五十三次四十番目の鳴海宿。現在の愛知県名古屋市緑区鳴海町内。知多半島の根の部分に位置する。芭蕉は貞享四年十月二十五日（新暦一六八七年十一月二十九日）に江戸深川を出立、同年十一月四日にこの鳴海宿で造酒屋を営む門人千代倉屋下里知足邸に泊まった（この間の東海道南下延べ日数は十日（同年十月は大の月）で、「[艸芳サイト](#)」の「[笈の小文](#)」の[旅程表①](#)を参考に計算すると、

深川からこの日の鳴海宿までの移動距離は凡そ三百四十六キロメートル、難所であった小田原から箱根越えの十六・六キロメートルを短として一田中谷川十四・五八キロメートルのペースを走破している。この時の鳴海では、

鳴海に泊りて

星崎の闇を見よとや啼く千鳥

の知られた佳吟と、江戸初期の堂上派の歌人飛鳥井雅章がこの鳴海宿で詠じた「けふは猶都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてて」という歌に興じての、

京までは半空や雪の雲

などをものしている（この二句は「笈の小文」に所収）。但し実は、前者「星崎の」は七日に泊まった鳴海の本陣寺島家分家であった安信の屋敷での句であり（四日～六日は知足邸泊）、後者「京までは」は先立つ五日の鳴海宿本陣の寺島まき亭での七吟歌仙の発句で芭蕉は「笈の小文」ではこの時系列を操作している。これは恐らくこの後、ここまで順調に向かってきた京への踵を返し、杜国を伊良湖に訪ね返さずにはいられないという芭蕉の主情を意識した、則ち、京への直線的なベクトルを一途に反転させる効果を句柄を以って狙ったものであるように私には感じられる。

その後、四日後の十一月八日、熱田の芭蕉の定宿であった門人林七左衛門桐葉の屋敷へ越人を迎えに行って同行の上、東海道を返して翌

貞亨四（一才）年十一月九日に再び越人とともに鳴海の知足邸へ戻って再泊した。

●「二十五里」約九十八キロメートル。地図上で芭蕉が戻ったと推定される旧東海街道及び渥美半島の渥美湾（三河湾）西沿岸沿いを計測してみると、現在の名鉄鳴海駅から畠村まで約九十七・七キロメートルあり、これは驚くべき極めて正確な数値である。

●「吉田」東海道五十三次三十四番目の吉田宿。現在の愛知県豊橋市中心部。「艸芳サイト」の「[笈の小文](#)」の[旅程表②](#)によれば、十一月十日当日の鳴海知足邸―吉田宿間の田原街道の移動距離は五十三・六キロメートルとある。

●「寒けれど二人寝る夜ぞ頼もしき」直截的な俳言もないストレートな恋句で、師と慕う芭蕉からかく詠ぜられた（と叫んでも私はこれをあからさまな同衾句などとして読んでいるわけではない）しかしやはり同時にこの時の随行した越人（凡そ三十歳）の、かくも詠まれた際の稚児の如きエクスタシーのさまは想像するに難くないのである。が、にも拘わらず、ここには薄い布団にくるまり、寒さを絶えながら、ぼそぼそと夜咄を語る二人の、如何にも夜の清冽にして静謐な心映えが感じられるから不思議ではないか。私はこの句が個人的に非常に好きである。こうした句を捧げられてしまった越人という存在を考えると、後に芭蕉から足が遠のいて、不遇孤独の彼の晩年というは何故か、私には腑に落ちてしまう気がするのだ。この句の存在によって越人は

芭蕉にとっても彼自身にとってもプエル・エテルヌス（永遠の少年）

たらざるを得なくなつたのだと私は思う。永遠の少年は脱皮して丁々発止と句を捻るような大人の風狂人とはなれない／なつてはならぬのである。

●「天津繩手」現在の豊橋市天津町。西南の田原まで繩を張つたように真つ直ぐに伸びる田舎道で景勝地であるが、冬場は三河湾からの身を凍らせる寒風が吹き荒ぶ。伊藤洋氏の「芭蕉DB」の本句の注に、『この地方では、「養子に行くか天津の繩手を裸で飛ぶ」かといわれ、共に辛いことの代名詞として使われたという』とある。

●「冬の日や馬上に凍る影法師」この句と、後に掲げた真蹟の「ゆきや砂むまより落よ酒の酔」を並べた時、その主客の違いよりも（前者は明らかに身を切るような寒風の中の自己の客体化であるのに対して後者は酒好きであった越人の囁みである）、絶対零度の孤高な己の姿を凍りつかせる自己沈潜を返す手で、酔いに居眠りをしてともすれば落馬しそうな可愛い門弟へのオードに仕立てる、ネガとポジの反転画の妙手に舌を巻く。

しかももう一つ、この句には仕掛けがある。「冬の日や」である。芭蕉七部集の巻頭、「尾張五歌仙」とも呼ばれる山本荷兮編の「冬の日」は、貞享元（一七一四）年刊で同年十一月の尾張国名古屋で芭蕉・野水・荷兮・重五・杜国・正平による歌仙五卷と追加の表六句から成る。巻の冒頭、プロパガンダ「狂句木枯の身は竹齋に似たるかな」を発句として芭蕉の新風を表わしたこの「冬の日」という語彙の持つイメージは、芭蕉という魂の独立独歩の旅立ちであると同時に、その瞬間に立ち会った愛弟杜国の面影を響かせることを狙っているのだと

私は思うのである。

そしてまた私は、この二句が醸し出すシークエンスの中に、この実
体、「形」としての「酔」うた馬上に揺れる愛弟子越人の後ろ姿、己
が「影」としての繩手の先に待っている同じく「少」^{わか}き遺愛の高弟杜
国の面影、そして二人を繋いでいる、己が一畝の、「老」年に近づい
た芭蕉という精「神」としての存在という配置を感じ、陶淵明の「形
影神」の一畝、

老少同一死

賢愚無復數

日酔或能忘

將非促齡具

老少同一死

老少同じきに一死し

賢愚復た數ふる無し

日に酔へば或ひは能く忘れんも

將た齡を促す具に非ずや

——二度とは生きることとは出来ぬ賢者であり愚者でもあるような風
狂の「無用者」どもの——三位一体の無言の対話を聴くような気も、
これ、するのである。

なお、「[艸芳サイト](#)」の「[笈の小文](#)」の[旅程表②](#)によれば、十一月
十一日当日の吉田宿—保美の杜国邸間の田原街道の移動距離は凡そ

三十五・九キロメートルとある。

●「保美村より伊良湖崎へ―畑ばかりもあるべし」やや実測的でない。現在の保見町の南端部から伊良湖岬までは凡そ六キロメートルは有にあり（後注参照）、実際、「[笈の小文](#)」の[旅程表②](#)では、この十月十日の保美の杜国邸と伊良湖岬の往復を二十・一キロメートルと算定されておられる。

『萬葉集』には伊勢の名所の内に撰び入れられたり「萬葉集」巻一（二三番歌）に、

麻續王の伊勢國伊良虞の島に流さえし時に、
人の哀傷して作れる歌

打つ麻を麻續王海人なれや伊良虞が島の玉藻苅ります

（やぶちちゃん現代語訳）……麻続王は海人であられるのか——いや、そうではない——だのに哀しくも伊良虞の島の藻を寂しく刈っておられる……

・「打つ麻」は打ってやわらかくした麻の意であるが、ここは「麻續王」の序詞（枕詞的なので特に訳さなかった）。

・「麻續王」は未詳。「伊良虞の島」は参照した中西進氏の講談社文庫版「万葉集」の同歌かの脚注では、伊良湖岬の先端から三・五キロほど先の神島（古くは、歌島・亀島・甕島などと呼ばれ、神の支配する島と信じられていた。江戸時代は鳥羽藩の流刑地であったため志摩八丈とも呼ばれた。また、三島由紀夫の「潮騒」のモデルでもある）と

するが、同別巻「万葉集辞典」の地名解説には伊良湖岬自体を指すという説も挙げる。これは伊勢から遠望した際、渥美半島自体が島に見えることによるものであろう。

ともかくも、芭蕉はここで本歌の島流しとされた麻統王の貴種流離譚を匂わせることで、その香を流謫の才人杜国のそれに通わせたと考えて間違いない。

●「洲崎」岬の浜辺。三崎の東側、遠州灘に面した、島崎藤村の「椰子の実」（『落梅集』所収）の詩や歌で知られる恋路が浜近くであろうと思われる（因みに知られた話ではあるが、あの詩は藤村の実体験ではなく、明治三一（一九〇〇）年にここに遊んだ柳田國男が、拾った椰子の實の話を友人の藤村に話し、それから創作された詩である。

なお、個人的な話になるが、ここはまた私の独身時代の数少ない独り旅で行った忘れ難い地でもある。私のブログ記事『フリードリヒ「朝の田園風景（孤独な木）」に私が「伊良湖岬恋路ヶ浜のフリードリヒ」と呼んだ、私の撮った枯木の写真がある。以下にも掲げておく。



●「碁石」これは石ではなく、碁石貝、即ち、斧足綱異齒亜綱マルスダレガイ科ハマグリ亜科ハマグリ *Meretrix Iusoria* のことである。「和漢三才図会」の巻六十九の「參州」の掉尾「土産」の項にも『碁石』とあって直下の割注で『伊良虞崎』とある。この殻から打ち抜いて碁石の白石が作られた現在では純国産種の *Meretrix Iusoria* の激減から幻の高級品となってしまった（今ではメキシコ産など輸入された同属別種の殻を素材としているという。ウイキの「碁石」による）。「伊良湖白」白の碁石（碁石蛤とも叫ぶ）では「常陸国風土記」に既に鹿島の蛤の碁石が名産として記述されている。ウイキの「碁石」によれば、『碁石の材料となるハマグリ』の代表的な産地は古くは鹿島海岸や志摩の答志島、淡路島、鎌倉海岸、三河などであった。鹿島のハマグリは殻が薄く、明治期の落語の速記本に「せんべいの生みたく反つくりけえった石」と描写されるように、古い碁石は『五ミリメートル』以下の薄いものが多い。その後、文久年間に宮崎県日向市付近の日向灘沿岸で貝が採取されるようになり、明治中期には他の産地の衰退と共に日向市のお倉が浜で採れるスワブテ蛤（地物の *Meretrix Iusoria* であろう）と呼ばれるものが『市場を独占し上物として珍重された。現在では取り尽くされてほとんど枯渇してしまっている。現在一般に出回っているものはメキシコ産である。黒石に対してハマグリ製の白石は非常に値が張る。高級品は貝殻の層（縞のように見える）が目立たず、時間がたっても層がはがれたり変色したりしない』とある。なお、黒石は黒色の石を用い、「那智黒」石（三重県熊野市産の黒色頁岩又は粘板岩）が名品とされる。

さて何故、ここで「伊良湖白」の碁石拾いかと考えてみると、思うにそれはここに流された孤高の隠者たるところの杜国と一つ、とも

に碁を打とうではないか、という芭蕉の匂付けにほかなるまい。

「骨山」恋路が浜が終わる東の遠州灘に突き出た鼻の部分、現在の伊良湖ビューホテルのある山（先の私の古い写真はまさにその麓西側直下の崖上を巡る表浜街道で撮ったものである。カルワリオ、ゴルゴダとは、凄いい！ 私が心惹かれた古木もまるで骨のようではないか！）。
痩身孤高の隠者を表象するに相応しい名である。

「鷹を打つ」鷹狩用の鷹を捕獲する。民間経営の「伊良湖観光ガイド」公式サイトの「[伊良湖岬の渡り鳥](#)」などによれば、伊良湖岬は本邦の鳥類の多くの「渡り」の中継地として有名で、特に秋の壮大な鷹の「渡り」で知られる。新暦の十月初旬をピークとして一匹に数千羽の鷹が天空を舞い、時には上昇気流を捉えて無数のタカが飛翔する「鷹柱」が出来、次々と対岸の伊勢・志摩を目指して飛んで行く「伊良湖渡り」が見られる。

●「伊良湖鷹など歌にも詠めりけり」藤原家隆の「壬二集」に、

ひき据^すゑよいらこの鷹の山がへりまだ日は高し心そらなり

とあり、また、芭蕉の慕った西行の「山家集」羈旅歌には（「山家集」通し番号一三八九及び一三九〇聯歌）、

二つありける鷹の、伊良湖渡りすると申しけるが、
一つの鷹は留まりて、木の末に掛りて待ると申し
けるを聞きて

巢鷹すだか渡る伊良湖が崎を疑ひてなほ木にかくる山歸りかな

はし鷹のすゞろがさでも古るさせて据ゑたる人の有難ありがたの世や

とあるのを受ける。但し、西行の歌の「巢鷹」とは雛の時に鷹匠が巢の中から捕えて人為的に育てた鷹を叫ぶのに対し、「山歸り」は「山回り」とも叫んで、幼鳥が年を越えて一羽二羽で毛変わりした後に捕獲し飼育した鷹を指す。詞書の「一つの鷹」はその「山歸り」の鷹である。鷹匠はそうした育てた鷹をここで渡らせて訓練したものらしい。従ってこの西行の一羽二羽のシーンは、

……伊良湖渡りをしようとする二羽の鷹を見た——でも「山歸り」の方は未だ自信がないものか——一羽は飛び立つたものの、暫くするとまた梢に戻ってきてしまうことだよ……

という意である。これについては、『鷹の生態を聞き取った二見浦での体験を詠』んだものらしく、『成人してからの出家者としての自身を「山歸り」に重ねている』（明治書院「和歌文学大系二十一」とある（二見での体験であるところから、和歌文学大系の通釈では「伊良湖渡り」を伊勢から伊良湖に渡ると解しているが、「山家集」では二見での詠の後に、伊良湖に渡った二首が挟まり、普通に読むならばこれは伊良湖の景と読める。従って私も「伊良湖渡り」と訳した。以上は「笈の小文」底本の頭注及び岩波古典文学大系版「山家集」の他、西行の和歌の解釈・引用については阿部和雄氏の「西行の京師 第二

部 第15回」を一読必考及び孫引きをさせて戴いた。無論、芭蕉

は確かに――岫の鷹を瞩目したに違いない。しかしそれが同時にこれらの和歌と連動し、驚くべき自動作用が引き起こされてゆくのである。

●「鷹一つ見付てうれし伊良湖崎」叫わずもがな、この鷹は孤高流浪の杜国を指し、しかし彼は尾羽打ち枯らした、「山帰り」（無論、辺地に住まう杜国のそれはまず「山帰り」「山回り」ではあるが）流滴のそれではなくて、師芭蕉が「うれし」と感ずるほどに文字通り「鷹揚」とした「直き心」を持った雄々しい風狂の鷹であった、と芭蕉は詠嘆したのである。安東次男氏は「芭蕉百五十句」で、鷹の博物学的考証を述べた後、『巢鷹は人に馴れ易く冒険を恐れぬが、山回は馴れにくく、逸れ易い』。しかし、先に掲げた二首目の『西行の詠口は山回の気むづかしさ、警戒心をむしろ頼もしさと眺めている。「なほ木」は「なほ、木……」、「直き」である』という私の感懐と同じ見解を示した後、西行の二首目の歌との関連を語る。ここで少し、西行の二首目について私の注を附しておく、「はし鷹」とは鷹の――歯、タカ目タカ科ハイタカ *Accipiter nisus* で、「すゞろがさでも」の「すゞろがす」とは、落ち着かず、そわそわさせるの意、「すず」に鷹につける「鈴」（鷹の尾羽の中央の二枚の羽を「鈴付け」と呼び、鷹狩りではそこに鈴を付ける）に、「古る」も鈴を「振る」に掛け、また「据ゑ」は鳥などを枝や止まり木・腕などに止まらせるの意を持ち、鷹の縁語でもある。この歌は、人格の諷諭詩で、

……成長したハシタカが鷹揚として――凜として静かに「鈴」を鳴らすように泰然自若とした人というものは――これ――なかなか世には得難いものよ……

という感懐を述べたものである。さて、安東は先に続けて、『はしたか（ハイタカ）』は鈴の語縁で「すす」の枕に遣う。二首を続にした狙は、山回のごとく自若とした人物はなかなか得難い、と云いたいのだろう』と訳した上で、杜国が『空米売買に連座の罪を問われて、尾張領分を追放されたのは貞享二年秋。四年冬といえば、網掛』（あがけ…飼鷹の―罇で当年生まれの野生の鷹を捕獲したものを「網掛けの若」。二歳以上の場合を「山帰り」「山回り」という）』にたとえればちょうど両回に当たった（二歳鷹を片回、三歳を両回と云う）。句作りの目付はこれだったに違ない。浮世を捨て二度の夏を越して、つまりにどの羽を替えてむしろ逞しくなった男の面構を、芭蕉は西行の鷹、いや、西行その人と眺めた』と安藤節が炸裂する。しかし、私には珍しく安東のその謂いが素直にすくと腑に落ちる。しかもその後、安東は私が好きで本句との関連を漠然と感じていた杜国の句、

うれしきは葉がくれ梅の―つ哉（「春の日」）

を掲げ、その相聞歌的共鳴性を分析して卓抜である（杜国の「うれしきは」の句は「鷹一つ」に先行する貞享二年若しくは貞享三年である。杜国の句について安東はさらにその下地をさえ探っているが、それはまた当該書を是非お読みになることをお勧めする）。

※

以下、発句の注に移る。

※

○「ご」を焼て手拭あぶる寒さ哉」「ご」は枯れ落ちた松葉の葉。囲炉裏の焚きものとした。近世は三河・尾張の方言として残った、と「広

辞苑」にある。吉田宿での吟。

○「ゆきや砂むまより落よ酒の酔」既に「冬の日や」で幾つか述べたのでそちらを確認されたいが、天津繩手から伊良湖へ向かう田原街道の途中には「江伊間」（「酔馬」とも書いた）という地名があった（現在の愛知県田原市江比間町）が、この句はその地名に掛けたものでもある。「むまより落よ」と戯れに命じている対象は無論、越人本人ではなく（しばしばそのような粗雑な解をして平然としている評釈があるが私は従えない）、彼の「酒の酔」に対して落ちよ、と馬の洒落に重ねて興じているのである。

○「いらご崎にる物もなし鷹の聲」「鷹ひとつ」の初案とも見られる。杜国邸での一齋を明けた十一月十二日の挨拶吟であろう。

○「夢よりも現の鷹ぞ頼母しき」知られた吉夢の俚諺「一罇汁一罇川茄子」に掛けた、やはり杜国邸での翌朝十一月十二日の挨拶吟であると同時に祝祭の句であろうが、杜国への主情的な思いが前面に出てしまつて比喻があらさまとなつてしまつて、かえつて興を殺いでしまつているように感じられる。

○「さればこそあれたきまゝの霜の宿」芭蕉は十一月十一日と十三日と三日間、杜国邸に泊まつているから、これはその十一日若しくは翌十二日の杜国謫居での詠である。杜国邸到着の十一日深夜と想像する方が、荒涼感に何とやらんもの凄さを加えてよいように私に思われる。「笈日記」の「さればこそ逢ひたきまゝの霜の宿」は面白い謂いで、

これなら挨拶句になると思うが、風国編「泊船集」はくせんでは、ただの書き誤りと断じている。予期していたこと（この場合は不安）がまさに的中した際に発する異様な「さればこそ」という感慨の措辞については、何か杜国の内実に深く感じ入った芭蕉の感懐が示されてあると叫ぶ。『艸芳サイト』の「笈の小文」の「保美（伊良湖）」の頁では、先に示した杜国の弟とも目される坪井庄八の、この訪問の五ヶ月前に起きた殺人と斬首の――弁が「さればこそ」と芭蕉に歎かせた告白ではなかったかという、興味深い仮説（八木書店一九九七年刊の大磯義雄氏の「芭蕉と蕉門俳人」に依拠されたものらしい）を立てておられ、なかなか説得力がある。

○「麥はえてよき隠家や畠村」こちらの方が前句に比すと遙かに自然な挨拶句である。陽光の景観から到着の翌十二日若しくは十三日の句である。なおこれは杜国邸での芭蕉・杜国（野仁）・越人の三吟、

麥はえてよき隠家や畠村

芭蕉

冬をさかりに椿咲くなり

越人

晝の空蚤かむ犬の寝かへりて

野仁

の発句であった。

ここに出る「畠村」は杜国の注で述べた通り、地名である。なお、新潮日本古典集成「芭蕉句集」の今榮藏氏の頭注には、畠村（畑村）『は保美村の隣村。愛知県渥美郡渥美町。杜国亭は畑村との村境に近くにあった』とある（現在は先に述べた通り、田原市に編入）。この叙述から実は杜国亭は現在の保美よりもっと伊良湖崎寄りだった

のかも知れない。「畑村」「畠村」という在所名が地図上では見当たらないが、保美からずっと田原街道を伊良湖岬方向に辿って見ると、「梅藪」という三叉路があり、その近くに「山畑」という地名を見出せる。

しかもここから計測してみると伊良湖岬突端までは訳三・九キロで芭蕉が「笈の小文」で叫んだ『一曲ばかり』とぴったり一弊する。杜国亭の正確な位置について、識者の御教授を乞うものである。なお、「芭蕉句集」の今栄蔵氏の頭注には、「麥蒔て隠れ家や畠むら」の真蹟には、「長安はもとよりこれ名利の地、空手にして錢なき者は行路かたし、といへり」という前書を附すとある。これは白楽天の「送張山人歸山崇陽」（張山人の嵩陽に歸るを送る）からの引用であるが、実は芭蕉は既に延宝八（一七〇〇）年の深川隱棲——世俗と決別した辞——でこれと全く同じ詩の引用を発句の前書に用いていることに着目せねばならない。以下に示す。

九の春秋、市中に住み侘びて、居を深川のほとりに移す。

長安は古來名利の地、空手にして金なきものは行路難し

と叫ひけむ人の賢く覺えはべるは、この身の乏しきゆゑ
にや。

柴の戸に茶を木の葉搔く嵐か

この引用をそのまま杜国の謫居の挨拶吟に用いたということほどもなおさず、芭蕉の杜国に寄せた思いが、師弟の粹を遙かに逸脱した尋常ならざる共時性の中にあつたことが痛感されるのである。

「院のみかど」どの上皇なのか、どのような折りなのか、諸注に載せない。「歴史地名ジャーナル」の第二十一回「[保美](#) [芭蕉](#)・[杜国](#)再会の地」によれば、この渥美半島先端部では中世には伊勢神宮外宮の神領地である伊良胡御厨が成立していたが、これは現在の渥美町西半の広い地域を占めていたと考えられており、保美村の西の亀山村や畑村なども後世、御厨七郷と呼ばれていることから、保美もまた伊良胡御厨のうちに含まれていたものと思われる、とあるのと何か関係があるか。識者の御教授を乞う。

○「梅つばき早咲ほめむ保美の里」これも陽射しと暖もりに充ちた十二日若しくは十三日の、しかもなお依然として杜国への挨拶吟でもあり続けている。芭蕉の挨拶句のヴァリエーションの数としては破格に多いように私には思われ、芭蕉の杜国との再会の喜びがそこからも窺われる。

○「先祝へ梅を心の冬籠り」新潮日本古典集成「芭蕉句集」の今栄蔵氏の頭注によれば、太田巴静撰「刷毛序」(宝永三(一七〇六)年刊)には、

権七にしめす

舊里を去てしばらく田野に身をさすらふ人あり。
家僕何がし水木のため身をくるしめ、心をいた
ましめ、其獠奴阿段が功をあらそひ、陶侃が胡
奴をしたふまことや道は其人を恥べからず。物
はそのかたちにあらず。下位に有ても上智のひ

とありといへり。猶石心鐵肝たゆむ事なかれ。

主も其善のわするべからず。

祝

先いはへ梅をこゝろの冬籠

芭蕉

という文を伴ってこの句が載るとあり（以上の原文は八木書店一九九七年刊の大磯義雄氏の「芭蕉と蕉門俳人」の「杜国新考」に載るものを参考にしつつ、恣意的に正字化して示したものである）、今氏は、この「權七」は杜国の下男らしく、句文は、その『隱宅の杜国に誠実に仕えた家僕』權七』に与えたもの。お前の主人は今不幸の身だが、やがて時が来る、との前途を祝い、慰めた意になる』とある。「水木」は「みづき」で水と薪たきぎ、薪水しんすいで家事のこと。「其獠奴阿段が功をあらそひ……」以下は杜甫の七言律詩「示獠奴阿段」に基づく。なお、「石心鐵肝たゆむ事なかれ」は、「石や鉄の如き堅固な志しを保って、主人に精励を尽くさねばなりません」という意、「主も其善のわするべからず」は「の」がやや不審であるが、「主人杜国よ、あなたもその忠僕の捨身の善行を忘れてはなりませんぞ」という謂いである。

示獠奴阿段

山木蒼蒼落日曛

竹竿^{たけ}^{たけ}畜^{たけ}泉分

郡人入夜争餘瀝

稚子尋源獨不聞

病渴三更回白首

傳聲一注濕青雲

曾驚陶侃胡奴異

怖爾常穿虎豹群

嶽文圖經に示す

山木 蒼蒼として 落日 瀾たり

竹竿 泔泔として 細泉 分かつ

郡人 夜に入りて 餘瀝を争ひ

稚子 源を尋ねて 獨り聞かず

嶽えを病みて 三更 白首を回らし

聲を傳へて 一碎 青雲を濕ほす

曾て驚く 陶侃が胡奴の異なるに

爾を怖しむ 常に虎豹の群れを穿てるを

・「嶽文圖經」中国南西の異民族の蔑称で七句目の「胡奴」も同じ。

ここは杜甫が水の乏しい赴任地夔州（現在の重慶）で下僕の阿段（嶽奴の男の通称）が水を捜し得たことを素材としている。

・「瀾」は落日の余光。

・「泔泔」 嫋嫋。細くしなやか、弱弱しいさま。ここは、辺境のその地では井戸がなく、山から滴る泉の水を細い粗末な「竹竿」（竹の筧）を以って廻らし、水を引くことを叫ぶ。

・「餘瀝を争ひ」とは、その筧に僅かに残った水を争い呑むことをいう。

・「稚子」私（杜甫）の下僕。

・「獨り聞かず」そうした水争いを余所に。

・「嶽えを病みて三更白首を回らし／聲を傳へて一碎青雲を濕ほす」

前句は水飲の病い（糖尿病）にあった主人たる私が深夜に白髪を振り乱し、水を求めに行った下僕の姿を求めるさまを謂い、後句はその頭上から、下僕の鬢髪が主人のために引いて来た、青雲を液化させたかのような瑞々しい水流が流れ落ちてくるさまを誇張的に描く。陶侃（二五九年～三三四年）は西晋・東晋の武将で陶淵明は曾孫といわれる。ここは彼が常人の能力を越えた不思議な胡奴を――縛っていたという故事に基づき、次の句の虎や豹の群れの中にさえ易々と分け入って平然とことを成すという離れ技、ひいては危難を顧みず、深夜に巧みに主人のための水を調達するという、杜甫よりも一歩踏み込み、貴賤を越えて勇敢にして忠実なる下僕の奉仕の心を率直に讃えている。（この原詩及び語注は曹元春氏の『芭蕉「権七にしめす」の杜甫の受容とその展開』（PDF版）を主に参考にさせて戴いたが、訓読は私のよしとする読みに従った。当該論文は大磯氏の論考も参考にされた力作で、杜甫の詩の解説は詳述を極め、他にも瀧三と保美のある渥美半島が孰れも乏水の地であるという共通性、杜国と権七の関係が芭蕉自身と旧主君藤堂良忠の關係に重ね合せ得る点などを指摘され、杜甫・阿段・杜国・権七を漂泊者の、時空を越えた老荘的系譜中の群像として位置付けておられる頗る興味深い論考であり、是非、ご一読をお薦めする）。而してそうした誠実な忠僕を持った杜国のさらに大きな人柄が叫びに示されるのである。

この前書を引用した大磯氏の書では保美在の「家田与八」なる実在の人物をこの杜国の家僕「権七」の有力な同定候補に比定されておられ、その過去帳などによる証左も頗る説得力がある（但し、他の研究者による全くの異説もそこには併記されてある。因みに私は大磯氏の書籍を持っておらず、以上は幸いにして[グーグル・ブックスの画像](#)で

視認出来た範囲にあったものである。なお、句柄とこれらの資料を
付き合わすならば、この句は十三日夜か出立した十四日の送別吟と詠
めよう。

……「梅」が散つてこの四ヶ月後の弥生も半ば、「冬籠り」の行李か
ら引き出された「檜笠」を被った杜国は伊勢にて芭蕉と再会、吉野を
目指して同行二人、遂にその「檜笠」を「桜」に「われも見せうぞ」
と「心」から「先」^{まづ}「祝」祭することとなるのであった。……」